

体育指導委員のスポーツ指導観

A Report on the Sport Coaching View Point of Semi-Public Sports Instructors

中 俊 博 (保健体育教室)

Toshihiro NAKA

地域住民を対象にスポーツ指導を行なっている体育指導委員のスポーツ指導観について質問紙法にて調査した結果、男女ともに学習者の運動能力の特性を考慮し、自主性を尊重し、競技会出場を目指さず、旧来の道の思想的伝統にとらわれず最近のスポーツ科学を取り入れ、また、チーム運営では上下関係よりも人間関係を重視し、指導者の権限の示威行為も温情的である。しかし、スポーツを精神修養の手段としてとらえ精神面の指導や、スポーツマンシップ、フェアプレー、挨拶、連絡面の指導は重視する傾向が見られた。

キーワード：体育指導委員、指導観、スポーツの価値意識

はじめに

運動部活動は学校教育活動の一環として充実した学校生活をおくるうえで重要な活動でもある。更に、生涯スポーツが展開している今日、学校での運動部活動の体験が将来の充実したスポーツ実践にも深く関与することも否定できない。ところが、最近の中学校では少子化、部活顧問の不足等から運動部活動が転機にきている。保健体育審議会²⁾でもこの部活動が討議され、①部員数や教員(顧問)数の減少、②教員(顧問)の高齢化による実技の指導力の不足、③勝利至上主義による過度の活動や指導の改善、学校体育大会の在り方などの望ましい活動内容の展開等の課題を挙げている。この答申の中で学校にスポーツの指導者(運動部活動の指導者、顧問)がいない場合は地域社会にゆだねることが適切かつ可能な場合にはゆだねていくことも必要であると記述している。しかし、運動部活動が学校教育から離れ社会体育で行われることにおいて学校、家庭の両者では不安や問題を抱えていることも否定できない。山口⁷⁾は生徒や親の9割以上が運動部活動の存続を希望している。一方、教師の半数は地域の社会体育への移行を希望し、生徒、親と教師との間に考え方のズレのあることを記述している。

スポーツ指導に当たり過度の勝利志向に陥ることなく望ましい運動部活動行なうには指導者のスポーツの観が深く関係する。即ち、指導者のスポーツ認識、指導目的、指導方法により学習者の充実したスポーツ活動は存在する。木下⁴⁾は、日本的スポーツ観はナショナリズム的スポーツ観と武士道的スポーツ観の両性格を示し、後進国的スポーツ観をも示すと指摘している。上杉⁶⁾は、日本人の伝統的価値意識として修養主義、鍛錬主義、精神主義、全力主義から構成された「苦しみのスポーツ価値意識」と指摘している。

まさに、日本的スポーツ観は遊戯性が欠如し、一心不乱に練習を継続し、指導者や先輩の指示どおり活動し、さらに、勝てば官軍負ければ賊軍の譬えにて、道理はどうあれ勝者は正義である

ことから、勝者になることこそ最高の価値である認識であったと言える。

しかし、最近のスポーツ実践の動機や目的として、生活習慣病の予防、自己表現、自己実現のためのスポーツ活動が加わってきている。「気軽に」「近くで」「短い時間で」「経費も安く」という要素が挙げられ、スポーツは生活必需品的存在となってきている。対抗戦を重視してきた大学のスポーツ活動でも、同好会のスポーツ活動が一般化し、競技志向に加え、快楽志向が目立ってきている。すなわち、スポーツに対する価値意識の多様化が余儀なくされている。日下等⁵⁾は一般成人のスポーツ観の変容の様態について因子分析し、「快楽—勝利主義」的スポーツ観は、スポーツ独自の要因の規定力が強く、「伝統主義」的スポーツ観は年齢等の歴史的、社会的要因の規定力が強く、「合理主義」的スポーツ観は学歴等の社会経済的要因の規定力が強いことを指摘している。

そこで、今後の運動部活動、地域スポーツ指導の基礎的資料を得るべく体育指導委員のスポーツ指導観を探ることとした。

ここで述べるスポーツ指導観とは、スポーツの指導目的観、競技観、技術観、認識観、権限の示威行為、人生観等スポーツ指導に含まれる観念形態の総称としてとらえている。

参考までに、スポーツ振興法により市町村におかれている体育指導委員について説明をする。

【スポーツ振興法第19条；市町村の教育委員会に、体育指導委員を置く。2、体育指導委員は、教育委員会規則の定めるところにより、当該市町村におけるスポーツ振興のため、住民に対し、スポーツの実技の指導その他スポーツに関する指導、助言を行なうものとする。3、体育指導委員は、社会的信望があり、スポーツに関する深い関心と理解をもち、及びその職務を行うのに必要な熱意と能力をもつ者に中から教育委員会が任命する。4、体育指導委員は非常勤とする。】

1 調査対象・方法

1) 調査対象者

今回の対象者は、平成8年度（1996年12月7～8日）W県体育指導委員研修会の参加者のうちアンケートに回答した74名（男、54・女、20）である。内訳は表1に示した通りである。

表1 調査対象者の年齢（人）

	20代	30代	40代	50代	60代	70代	平均年齢
男性	2	11	19	11	9	2	48.5±11.7
女性		2	8	6	4		50.3±7.9

（平均値±標準偏差）

表1より、男性指導委員の年齢は20歳代から70歳代、女性の場合は30歳代から60歳までの幅のある年齢層であり、平均年齢は男性、48.6±11.7歳で、女性、50.3±7.9歳である。男女ともに中高年層が目立った。

表2は対象者の過去に出場した競技会について競技水準別に要約したものである。

表2より、府県大会よりも競技水準の高い地区、全国、国際大会の出場者の比率の合計は男性、約75%、女性、65%を示していることから、殆どの者が競技会での良い成績を目指してスポーツ

表2 競技水準別出場競技大会 《上欄：人数 下欄：比率 (%)》

	国際 大会	全国 大会	地区 大会	府県 大会	市町村 大会	出場 なし	無回答
男性	3 (5.6)	17 (31.5)	11 (20.4)	9 (16.6)	5 (9.2)	1 (1.9)	8 (14.8)
女性	1 (5.0)	5 (25.0)	4 (20.0)	3 (15.0)	1 (5.0)	2 (10.0)	4 (25.0)

を行ない、チャンピオンを目指した競技的スポーツ歴の持ち主といえる。

以上の結果から対象者は、スポーツの技術面、指導面で自信をもって住民に指導していると考えてよいであろう。

2 方 法

スポーツ指導観についてアンケートの調査項目を作成するに当たり先に記述した、指導目的観、競技観、技術観、認識観、権限の示威行為等を配慮して、先ず、(1)指導目的観に関しては、指導性と自発性、(2)競技観に関しては、勝利志向と快楽志向、(3)認識観に関しては伝統・礼儀志向と合理性、(4)権限の示威行為については高圧的か温情的かの4要因に着目して20項目の質問を行なった。

なお、回答するに当たり、指導者の考え方の相違を把握すべくA、B相対する質問項目からどちらが自分のスポーツ指導観であるかを判断するように回答を求め、明確に判断できない場合はA、Bどちらの方が自分のスポーツ指導の考え方に近いかを判断するようにした。それでも判断できない場合はCの「どちらでもない」に回答するようにした。

3 結果・考察

結果を要約するに当たり、各要因別に質問項目を掲げ、さらに、性、年齢の特性も見るべく、①回答結果を男女全体、②男性全体、③女性全体、④50歳以下の男性、⑤50歳以上の男性、⑥50歳以下の女性、⑦50歳以上の女性別に数値（比率）を要約する。

1) スポーツ指導における指導性と自主性

質問項目は次に示す1から5の5項目である。

- 質問1 A 運動能力に違いがあってもすべての人に同じ経験や活動をさせる。
B その人の運動能力の特性に応じて経験や活動をさせる。
C どちらともいえない。
- 質問2 A 技術が上達するために指導者の考えや計画をおしつける。
B 技術が上達するために学習者の考えや計画を尊重する。
C どちらともいえない。
- 質問3 A 技術が上達するために指導者はていねいに、計画にそって指導する。
B 技術が上達するために指導者は課題の大枠を決め、あとは学習者の自主性にまかす。
C どちらともいえない。
- 質問4 A トラブルが生じた時、指導者はただちに入って解決する。
B トラブルが生じた時、学習者（チーム）に解決をまかす。

- C どちらともいえない
- 質問5 A 学習者（チーム）が相互に気持ちや要求を理解しあってゆずりあうように指導する。
 B 学習者（チーム）が自分の気持ちや要求を率直に主張するように指導する。
 C どちらともいえない。

質問1から5までのA, B, C, のそれぞれの比率を表示したのが表3である。

表3 要因1（指導性と自主性）の全体、性、年齢別回答結果 (%)

		男女 全体	男性 全体	女性 全体	男50歳 以下	男50歳 以上	女50歳 以下	女50歳 以上
Q1	A	14.9	16.7	10.0	12.5	22.7	0.0	20.0
	B	79.7	77.7	85.0	81.3	72.7	90.0	80.0
	C	5.4	5.6	5.0	6.2	4.6	10.0	0.0
Q2	A	13.5	14.8	10.0	15.6	13.6	20.0	0.0
	B	67.6	68.5	65.0	65.6	72.7	50.0	80.0
	C	18.9	16.7	25.0	18.8	13.6	30.0	20.0
Q3	A	39.2	37.0	45.0	40.6	31.8	40.0	50.0
	B	58.1	61.1	50.0	59.4	63.6	60.0	40.0
	C	2.7	1.9	5.0	0.0	4.6	0.0	10.0
Q4	A	36.5	42.6	20.0	40.6	45.5	10.0	30.0
	B	40.5	38.9	45.0	37.5	40.9	40.0	50.0
	C	23.0	18.5	35.0	21.9	13.6	50.0	20.0
Q5	A	57.2	53.7	50.0	53.1	54.5	60.0	40.0
	B	39.2	44.4	25.0	43.8	45.5	10.0	40.0
	C	8.1	1.9	25.0	3.1	0.0	30.0	20.0

質問1：回答結果の比率に着目して述べると、男女全体でBの個人の運動能力を考慮した指導を示すものが79.7%であり、この傾向は男女、また、50歳以下、以上の年齢全てにおいてほぼ同様の傾向を示したが、50歳以上の男性のみAの同じ経験、活動をさせるが22.7%であったことから男性の年長者は運動能力の違いを知りつつ、やはり平等に指導したい気持ちが若年層や女性に比較してやや高いことがうかがえる。

質問2：技術上達を目指した際の指導は、男女全体でBの学習者の考えを尊重するとの回答が67.6%である。しかし、50歳以下の女性のBの比率が50%と若干低い数値を示しているが概観すれば、「おしつけ」よりも「学習者の考え尊重」の指導といえる。

質問3：技術指導ではポイントを指示し、あとは学習者の自主性にまかす指導が男女全体で58.1%を示し自主性尊重型といえるものの、数値に着目すれば先の質問1, 2と比較して指導性の強い傾向を示していて、やはり、技術の上達を期待すれば指導が強くなると言えよう。

質問4：トラブルの発生した時の解決法については、男女全体ではBの学習者（チーム）に解決をまかすが40.5%で、Aの指導者が解決するの36.5%であり、わずかであるかチームで解決する指導といえる。しかし、男性ではAが42.6%、Bが38.9%であり、一方、女性ではBが45%、Aが20%、更に、男性50歳以上が指導者解決45.5%、女性50歳以上ではチーム内解決が50%であることから男女間で相違が見られる。

これは、トラブルの内容、原因との関係でその対応法も異なるがこの質問では、性、年齢で相違が見られ、男性はトラブル時に指導性が高く、女性はチーム内で解決を図る傾向があるといえよう。

質問5：チームのメンバーの気持ちや要求の対応について、男女全体ではメンバーが相互に理解し譲り合いようにするAの互譲型指導が57.2%であり自己の気持ちや要求を自己コントロールする指導である。しかし、男性はBの気持ちや要求を素直に主張するが44.4%であり、また、女性50歳以下では、Aが60%、Bが10%で、反対に女性50歳以上ではA、Bそれぞれ40%であることより男女間、年齢間で相違が見られ、チーム運営と個人の気持ちや要求の対応の困難さがうかがえる。

指導性と自主性から見た指導観は運動能力、技術面では学習者の自主性を尊重しているが、チームのトラブル面の解決ではチーム間での解決を第一としながらの男女、年齢間で相違が見られる。また、自己の気持ちや要求については基本的には相互理解や互譲の指導ではあるが、男性では女性に比べ自己の気持ちや要求を率直に主張する指導が高い。

このように学習者の自主性尊重が見られるのは、全国高校野球の監督の記者会見でも、選手に任せられたゲームであるとか、練習は選手の自主性を尊重しているとの監督の発言からもうかがえるように学習者、指導者ともにスポーツは自主的に行なう活動であるとの考え方が流布していることも要因の一つであり、まして地域住民を対象とした場合は当然の結果であるとも言える。

2) 勝利志向と快樂志向

質問項目は次に示す6から9の4項目である。

- 質問6 A 一つの種目に熱中し継続して行なうように指導する。
B いつでもやめられる気楽さを考慮して行なうように指導する。
C どちらともいえない。
- 質問7 A 競技会、大会をめざして指導する。
B 競技会、大会よりも楽しさをめざして指導する。
C どちらともいえない。
- 質問8 A 大切な試合では、勝利のために全員が出場できなくてもしかたがない。
B 大切な試合であっても、全員が出場できるように配慮する。
C どちらともいえない。
- 質問9 A スポーツマンシップやフェアプレイよりも勝利志向を重視する。
B スポーツマンシップやフェアプレイの指導を重視する。
C どちらともいえない。

表4 要因2（勝利志向と快樂志向）の全体、性、年齢別回答結果 (%)

		男女 全体	男性 全体	女性 全体	男50歳 以下	男50歳 以上	女50歳 以下	女50歳 以上
Q6	A	35.1	31.5	45.0	40.6	18.2	40.0	50.0
	B	45.9	51.9	30.0	40.6	68.2	20.0	40.0
	C	19.0	16.6	25.0	18.8	13.6	40.0	10.0
Q7	A	17.6	18.5	15.0	21.9	13.6	20.0	10.0
	B	74.3	70.4	85.0	62.5	81.8	80.0	90.0
	C	8.1	11.1	0.0	15.6	4.6	0.0	0.0
Q8	A	27.0	29.6	20.0	43.8	9.1	20.0	20.0
	B	60.8	59.3	65.0	40.6	86.4	60.0	70.0
	C	12.2	11.1	15.0	15.6	4.6	20.0	10.0
Q9	A	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	B	94.6	92.6	100.0	93.8	90.1	100.0	100.0
	C	5.4	7.4	0.0	6.2	9.1	0.0	0.0

表4は、勝利志向と快楽志向についての質問結果をA、B、C別の比率を示した表である。

質問6：男女全体で見るとBの気楽さを意識した指導が45.9%、Aの熱中し継続して行なうことを重視している比率は35.1%である。しかし、男性の50歳以上はBが68.2%と、この中で一番高い数値であり気楽さ志向が高い、反対に女性の50歳以上はAが50%と熱中・継続志向が高く男女の相違が見られる。

質問7は競技会を目指した指導か、楽しさを目指した指導かについての質問である。男女全体では、Bの楽しさを目指す指導が74.3%、Aの競技会志向、勝利志向は、17.6%であり、男女年齢を問わず快楽重視の指導が強く見られる。

質問8：重要な試合での指導観の質問である。男女全体では、Bの大切な試合であっても全員出場できる配慮をする指導が60.8%である。特に男性50歳以上が86.4%と目立って高い数値であり全員出場への配慮の高いことがうかがえた。一方、50歳以下の男性はAの全員出場できなくてもしかたがないが43.8%でありやや勝利志向のうかがえられ年齢間で若干の相違が見られる。

質問9：勝利志向かスポーツマンシップやフェアプレイ重視かについての質問である。男女全体でBのスポーツマンシップ、フェアプレイ重視の指導を示す比率は94.6%であり、男女年齢に関係なく明確にスポーツマンシップを重視した指導が強く見られる。

地域住民を主体にした指導だけに競技会出場、勝利を第一目標にするのではなく、気楽な気持ちで全員参加のスポーツ指導である。しかし、スポーツマンシップ、フェアプレイといった正々堂々と競技することの指導は重視していると考えられる。

3) 伝統、礼儀志向と合理性

質問項目は次に示す10から15の6項目である。

- 質問10 A クラブの伝統、しきたり、慣習を重視して指導する。
 B クラブの伝統、しきたり、慣習にとらわれず、合理的、科学的に指導する。
 C どちらともいえない。
- 質問11 A スポーツは精神修養の手段でもあるから精神面の指導も重視する。
 B スポーツは楽しさや気晴らしの手段であるから精神面、修養面は重視しない。
 C どちらともいえない。
- 質問12 A スポーツでは上下関係を重視するから、礼儀や作法の指導を重視する。
 B スポーツでは人間関係を重視するから、和気あいあいの状態をつくるようにする。
 C どちらともいえない。
- 質問13 A 練習を休む際、必ず本人やメンバーから指導者に報告するように指導する。
 B 練習を休む際、必ずしも連絡しなくともよいと考える。
 C どちらともいえない。
- 質問14 A 練習中の休憩は必ず指導者の許可を得るように指導する。
 B 練習中の休憩は学習者に判断させ指導者に報告するように指導する。
 C どちらともいえない。
- 質問15 A 始めと終わりのあいさつは学習者（チーム）全員そろって行なう。
 B 始めと終わりのあいさつは学習者個人にまかせる。
 C どちらともいえない。

精神、伝統、礼儀、主従関係等を重視してきた日本のスポーツ観の特性について指導者の考えについて、社会変化、スポーツ科学の発展との関連もあり興味深いところでもある。

回答結果は、前述のように表5に示した。

表5 要因3（伝統、礼儀志向と合理性）全体、性、年齢別回答結果 (%)

		男女 全体	男性 全体	女性 全体	男50歳 以下	男50歳 以上	女50歳 以下	女50歳 以上
Q10	A	10.8	13.0	5.0	15.6	9.1	0.0	10.0
	B	78.4	77.8	80.0	75.0	81.8	70.0	90.0
	C	10.8	9.2	15.0	9.4	9.1	30.0	0.0
Q11	A	52.7	57.4	40.0	63.8	40.9	20.0	60.0
	B	27.0	29.6	20.0	15.6	50.0	20.0	20.0
	C	20.3	13.0	40.0	15.6	9.1	60.0	20.0
Q12	A	27.0	35.2	5.0	40.6	27.3	0.0	10.0
	B	68.9	61.1	90.0	53.1	72.7	90.0	90.0
	C	4.1	3.7	5.0	6.3	0.0	10.0	0.0
Q13	A	81.1	79.6	85.0	84.4	72.7	90.0	80.0
	B	13.5	16.7	5.0	9.4	27.3	0.0	10.0
	C	5.4	3.7	10.0	6.2	0.0	10.0	10.0
Q14	A	36.5	35.2	40.0	31.3	40.9	40.0	40.0
	B	51.4	51.9	50.0	53.1	50.0	50.0	50.0
	C	12.1	12.9	10.0	15.6	9.1	10.0	10.0
Q15	A	70.3	68.5	75.0	62.5	77.3	70.0	80.0
	B	21.6	24.1	15.0	25.0	22.7	20.0	10.0
	C	8.1	7.4	10.0	12.5	0.0	10.0	10.0

質問10：伝統、慣習重視の指導と伝統、慣習を打破した合理的な指導であるかについての結果は、男女全体では、Bの伝統、慣習を打破し、合理的、科学的指導は78.4%であり、男女、年齢別でも同様な比率を示していることがうかがえる。これは、前述の日下等の指摘にもあるように、社会変化、やスポーツ科学の進歩発展が関与していると考えられる。

質問11：近代スポーツは遊びから発生し、気晴らしの要素を持つが、この側面から見ると男女全体ではAの精神修養の手段として精神面の指導を重視するが、52.7%であり、男性50歳以下が63.8%、女性50歳以上が60%である。男女、年齢間で若干の相違が見られるもののスポーツはベストを尽くす、克服する、挑戦する等の精神面を修養する活動であるとの指導が目立つ程ではないが強いことがうかがえられる。

質問12：スポーツ活動時における指導者と学習者との関係について、主従関係的な上下関係重視と民主的な人間関係重視との質問では、男女全体で68.9%がBの人間関係重視で和気あいあいの状態での指導であり、特に女性は90%を示し、男性より一層人間関係を重視していることがうかがえる。

質問13：Aの練習を休む際は必ず、本人が指導者に連絡するとの回答が、男女全体では81.1%と高い数値であり、しかも、男女年齢を問わず同傾向を示している。このことは、連絡を行なうことは、人間関係や礼儀の基本であるとの意識からか、また、先の質問12での人間関係重視とも関連し、和気あいあいの状態をつくるためにも相互で連絡をし合うことが必要なのであろう。

質問14：練習中に休憩をとる際の方法については、Bの学習者の自己判断にまかすが男女全体では51.4%であり、男女年齢を問わずや5割の指導者が自主性を尊重している。

一方、Aの練習中でも必ず指導者の許可を得るように指導するのが、男女全体で36.5%であり約3割から4割の者が練習中でも許可を得る指導である。運動能力、技能面では個人差を尊重し

た指導であるが、練習中の休憩についてはやはり指導者の許可なく練習を途中で休むことは礼儀の欠如か、さてまた怠惰と解釈する指導者の判断なのか不明ではあるが、このことは先の精神面を強調する指導とも無関係ではないと考えられる。

質問15：始めと終わりの挨拶の指導であるが、Aのチームが全員そろって行なうが男女全体を見ると、70.3%であり、男女、年齢を問わず約7割から8割の指導者は全員そろって挨拶をする指導である。これは、全員揃って挨拶を行なうことで集団の仲間意識の向上、モラルの高まりも期待でき、さらに、「親しき仲にも礼儀あり」、「礼に始まり礼に終わる」譬えにて礼儀重視が見られる。

4) 指導者の権限の示威行為（高圧的と温情的）

質問項目は次に示す16～20の5項目である。

質問16 A 仲間の指導者の意見に左右されずに自分の信念に従って指導する。

B 仲間の指導者の意見を参考にしながら指導する。

C どちらともいえない。

質問17 A 学習者に対して失敗や誤りのしないように慎重に取り組むように指導する。

B 学習者に対して失敗や誤りをおこしてもいいから積極的に取り組むように指導する。

C どちらともいえない。

質問18 A 失敗（ミス）や誤り（エラー）やをおこした場合は、指導者がきびしく対処する。

B 失敗（ミス）や誤り（エラー）やをおこした場合は、要点のみを指摘してあとは本人にまかせる。

C どちらともいえない。

質問19 A 目標や年間計画等の決定についてはリーダー等中心の人々で行なう。

B 目標や年間計画等の決定については学習者（チーム）全員で行なう。

C どちらともいえない。

質問20 A 学習者（チーム）一人一人のペースよりも、学習者（チーム）のまとまりを重視する。

B 学習者（チーム）のまとまりよりも学習者（チーム）の一人一人のペースを重視する。

C どちらともいえない。

質問16：指導に当たり自己の信念と指導者仲間との関係については、Bの仲間の指導者の意見を参考にするが男女全体で93.2%であり、男女、年齢問わず同傾向であり、9割以上の者が意見交換を行ない、高圧的、自己中心的な指導ではないといえる。

質問17：学習者の取り組みでの示威行動については、Bの失敗を恐れず積極的に取り組むように指導するが男女全体で83.8%であり、学習者の意欲を出させるために高圧的、叱責的な指導ではなく親和的、温情的指導といえる。

質問18：学習者が失敗や誤りをおこした場合の対応については、Bの要点のみを指摘してあとは本人にまかせるが男女全体で86.5%であり、穏やかな雰囲気での指導がうかがえられる。

質問19：目標や年間計画等の決定方法で首脳型か部員型かについては、Bのチーム全員で行なう部員型が、男女全体で60.8%であるが、50歳以上の男性ではBが59.1%でAのリーダー等の中心の人々で行なう首脳型が40.9%となり年齢間で相違が見られる。

質問20：チーム運営において一人一人のペースを重視かチーム全体のまとまりを重視するかについては、男女全体でAのチームのまとまり重視が54.1%でBの一人一人のペース重視が31.1%である。また、男性では50歳以下ではAが65.6%であり、50歳以上ではBが50%を示し、年齢で

相違が見られる。運動能力や技能面では個人差の配慮は明確であるが、チーム運営ともなれば個人のペースを配慮することは困難なことともいえる。

表6 要因4（権限の示威行為の高圧的と温情的）の全体、性、年齢別回答結果（％）

		男 女 全 体	男 性 全 体	女 性 全 体	男 50 歳 以 下	男 50 歳 以 上	女 50 歳 以 下	女 50 歳 以 上
Q16	A	2.7	3.7	0.0	3.1	4.5	0.0	0.0
	B	93.2	94.4	90.0	93.8	95.5	80.0	100.0
	C	4.1	1.9	10.0	3.1	0.0	20.0	0.0
Q17	A	10.8	7.4	20.0	12.5	0.0	20.0	20.0
	B	83.8	87.0	75.0	81.3	95.5	70.0	80.0
	C	5.4	5.6	5.0	6.2	4.5	10.0	0.0
Q18	A	4.1	5.6	0.0	9.4	0.0	0.0	0.0
	B	86.5	87.0	85.0	81.3	95.5	70.0	100.0
	C	9.4	7.4	15.0	9.4	4.5	30.0	0.0
Q19	A	31.1	31.5	30.0	25.0	40.9	30.0	30.0
	B	60.8	61.1	60.0	62.5	59.1	50.0	70.0
	C	8.1	7.4	10.0	12.5	0.0	20.0	0.0
Q20	A	54.1	57.4	45.0	65.6	45.5	30.0	60.0
	B	31.1	35.2	20.0	25.0	50.0	10.0	30.0
	C	14.8	7.4	35.0	9.4	4.5	60.0	10.0

4 要 約

今回の調査した体育指導委員のスポーツ指導観は、地域住民を対象に指導していることもあり、競技会出場を目指さないことから、学習者の運動能力、技能を考慮して自発性を尊重した指導であり、チームの雰囲気も親和的、温情的である。しかし、スポーツを精神修養の手段として把握し全体で挨拶をする、連絡をする、許可をとるという礼儀面を重視する指導がうかがえる。また、スポーツマンシップやフェアプレイも重視する指導である事がうかがえる。

今後、中学生を対象に指導する場合は、第二の成長期であり、個人差の目立つ時期でもあり、この個人差が中学生の勝敗観、競争観の相違のもととなり勝利志向と快楽志向の志向差と個人の意見や考えを尊重する指導者の考えの間においてどのように対処するか検討を要する。

体育指導委員は荒井¹⁾のよれば、最初はレフエリー的存在であり、その後コーチ的存在となり更にマネージャー的存在と変容してきていると指摘している。特に、企画、運営を考えた指導が必要となってきた現状を考えれば、今後の研鑽が重要であろう。

地域スポーツクラブはそれぞれ地域での発展してきた特徴を持参している。一つの定まった型の地域スポーツ活動はありえない。地域スポーツクラブの類型としてPTA型、自治会型、学校型、連合型、法人型、民間委託型等提示⁷⁾している。地域スポーツの充実には市町村の生涯スポーツ課はじめ、体育指導委員の役割は重要となるであろう。

ジョン・カー³⁾は日本でのラグビーのコーチング体験から日本のスポーツの第一印象をプレーの多様性の欠如と指摘している。多様化しているスポーツ需要の充足を考えるとそれぞれの体育指導委員が個性をだした指導をせまられているといえよう。

最後にご協力いただきました体育指導委員の皆様に感謝いたします。

付記：今回の調査対象者は74名でありW県体育指導委員全員（638名）の指導観ではない。参考までにW県の体育指導委員の実態調査⁸⁾の一部を掲げる。

男性500人，女性138人の合計638人である。年齢層，職業，経験年数別人数は次の表7に示す。

表7 W県における体育指導員の実態

1) 年齢層別人数 (人)						
	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代
人数	37	119	232	154	77	19
2) 職業別人数 (人)						
	教員	公務員	会社員	自営	その他	
人数	68	100	189	174	107	
3) 経験年数別人数 (人)						
	2年未満	2～4年	4～6年	6～8年	8～10年	10年以上
人数	83	77	63	69	59	287

参考文献

- 1) 荒井貞光：生涯学習時代の体育指導委員，地域における生涯スポーツの振興，ぎょうせい，1993，pp.140-149
- 2) 保健体育審議会：生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について，「運動部活動」1997.7.<http://www.monbu.go.jp/singi/hoken/>
- 3) ジョン・カー：日本スポーツの第一印象，体育科教育，大修館書店，1996.1p.45
- 4) 木下秀明：スポーツの近代日本史，杏林書院，1970，pp.103-104
- 5) 日下裕弘，丸山富雄：一般成人のスポーツ観に関する研究，体育・スポーツ社会学研究7，体育・社会学スポーツ研究会編，道和書院，1988.p.158
- 6) 上杉正幸：スポーツの価値パターンとその関連要因の分析，一流競技参与者と地域スポーツ参与者の比較，体育・スポーツ社会学研究9，体育・社会学スポーツ研究会編，道和書院，1990.pp1-21
- 7) 山口泰雄：地域社会の活性化とスポーツクラブ，スポーツと健康，文部省，1991，p.8-10
- 8) 和歌山県教育委員会：平成10年度和歌山県生涯スポーツの現状，p.71